

VII 研究のまとめ

研究主題「社会に変革を起こす子どもの育成」の下、2年次は副主題を「『非認知的能力』を高める学びのデザインを通して」とし、研究を進めてきた。各教科等では、問題解決的な学習の中で、重視する非認知的能力が発揮された姿が現れるまでの子どもの意識や活動を学びのプロセスとして想定した。そして、そのプロセスを生み出す学びのデザインを明らかにしてきた。その結果、非認知的能力を発揮する姿が各教科等で見られた。以下はその一例である。

【体育科】（2年「ボンバーゲーム」）

共通のめあて「捕る・投げる・落とす動きのポイントを見付けて練習してボンバーゲームを楽しもう」の達成に向けて、得点につなげるためのボールを投げる場所について、試行錯誤する場面

（同じチームの仲間のゲーム中の動きを見ながら応援している中で）

G：（チームフラッグを広げて仲間にチームロゴを見せながら見ている。）

C：（相手コートの守りのいないサイドライン際をねらってボールを投げるが、アウトになってしまう。）

G：（何度か片足で床を踏みながら）おっしい。いいところ。

C：（相手コートの守りのいないネット際をねらってボールを投げて、得点する。）

G：（飛び跳ねながら）よしっ。

（自分がゲームに参加している中で）

G：（相手コートの守りのいないネット際をねらってボールを投げるが、相手に捕られてしまう。）

C：おっしい。大丈夫大丈夫。

G：（次も相手コートの守りのいないネット際をねらってボールを投げる。）

G：（相手コートにボールが落ちて、ガッツポーズをしながら）やったあ。

このようにGからは、同じチームの仲間の動きに対して、励ましたり歓声をあげたりしており、社交性を発揮している姿や、得点につながらない状況においても、繰り返し相手のいない場所を狙って投げ、自信を発揮している姿が見られた。この姿は、仲間の動きに興味をもち、同じチームの仲間と互いの目標とする動きを目指そうとする思いや失敗をしても挑戦を続けられればできるという思いが感じられる。この思いは、運動の課題に応じた解決策を仲間に伝え、互いに目標とする動きを目指していくことができる、「社会に変革を起こす子ども」につながるものが十分に考えられる。

【理科】（4年「金属、水、空気と温度（水の三態変化）」）

問題「水が沸騰したときの泡は何だろうか」の解決に向けて、沸騰している水の中から出る泡を袋で集め、その様子を調べた実験の結果を基に、考察について話し合う場面

【ペアでの話し合い】

M：袋が膨らんで、水滴がついたから、泡は空気と水だと思う。

K：うん。でも、空気だとしたら、膨らみ続けるから（沈黙する）

【ペアで、他の班の友達の考察を見に行く】

K：どの班も、はっきり分かんないみたい。

M：（困惑した表情で）「袋が膨らんだのは一瞬で、すぐにしぼんだから、空気とは言えない」だって。どういうこと？

K：そこが、変だと思うんだよね。でも、水だけだと、膨らまないでしょ？

【班に戻り、班で話し合う】

M：（困惑した表情で）見てきたけれど、まだ分からないよ。しぼむのが変じゃない？

C：（動画を見せながら）他の班がさあ、水滴がつき始めたら、しぼんだって言ってたんだよね。

M：（驚きの表情で）あ、確かに。もう1回、動画をスローで見てみようよ。

このように M からは、自分とは異なる考察に対して、「どういうこと？」と詳しく知りたいという思いを表したり、考察の違いについて自分の班の友達に自ら問いかけて不確かさを解消しようと働きかけたりと、社交性を発揮した姿が見られた。この姿は、一度もった自分の考察に固執せず、他者の考察に興味をもち、もう一度自分の考察を見つめ直そうという思いが感じられる。この思いは、実験の結果と考えとの結び付きに確かにしようと他者と関わっていくことができる、「社会に変革を起こす子ども」につながる事が十分に考えられる。

これらのように、各教科等の研究において、「非認知的能力」に着目し、学びのデザインを工夫してきたことで、「非認知的能力を発揮する姿」が、多くの教科等の問題解決的な学習の中で見られ始めてきた。そして、その中で、「社会に変革を起こす子どもの姿」や、その姿のきっかけとなる姿が見られている。非認知的能力は、「社会に変革を起こす子ども」の育成のために、3つの分類全てが重要であると考ええる。本研究では、重視する非認知的能力を捉えてその能力に着目してきたが、各教科等の問題解決的な学習において、子どもたちが非認知的能力を発揮し、他者と互いの考えに影響を与え合うという認知能力と相互関係にある姿や、重視していない非認知的能力を発揮する姿、先行研究のように他の非認知的能力に影響を与えている可能性がある姿も見られている。

本研究の結果、以下の成果と課題が明らかとなった。

- 各教科等において、「社会に変革を起こす子ども」の育成に向けて、「非認知的能力を発揮する姿」が現れるための学びのプロセスと、そのプロセスを生み出す学びのデザインの工夫を行った。その結果各教科等の問題解決的な学習の過程に真正さを増して改善され、「非認知的能力を発揮する姿」が多くの教科等の学びの中で見られるようになった。
- 各教科等部では、「社会に変革を起こす子ども」の育成において重視する非認知的能力を発揮した姿の具体を捉えた。さらに、その姿が現れるための学びのプロセスを想定し、学びのデザインを工夫した。学びのデザインを工夫する際には、「真正な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点を基に工夫を行った。その結果、学びのデザインの工夫をする際に、具体的な文脈や状況を含ませて、子どもたちの学びの真正さを担保したことが、非認知的能力の発揮に影響を与える一要因であると明らかになった。また、非認知的能力を発揮した姿が現れるまでの子どもの意識や活動を想定したことも一要因であると考えられる。
- 各教科等の問題解決的な学習において、重視する非認知的能力を発揮した姿が現れたことによって社会に変革を起こす姿が見られるようになった。「社会に変革を起こす子ども」を育成するためには、情報活用能力だけではなく、非認知的能力とも関係があることが明らかとなった。また、非認知的能力は、互いに影響する姿も少なからず見られた。
- 非認知的能力の高まりについては、非認知的能力を発揮した姿を段階的に捉えてその姿が多く現れることにより実現しようと研究を進めてきた。しかし、非認知的能力の評価の困難さと、短期間での高まりの困難さがある。そのため、非認知的能力の高まりに向けて、長期的で継続的な取組と子どもたちの姿の見取りが必要となる。
- 各教科等部の研究では、1年次研究における「社会に変革を起こす子ども」の姿の課題性と教科特性とを基にして、重視する非認知的能力とそれを発揮した姿を捉えてきた。本研究においては、重視する非認知的能力が各教科等によって多少異なることと、非認知的能力が他の非認知的能力に影響を与えることにより、重視する非認知的能力をバランスよく高めていくことができると考える。一方で、同じ非認知的能力に着目をしていてもその姿に多少のずれが生じてしまう現状がある。「社会に変革

を起こす子ども」を、各教科等の学習で横断的に支え合いながら育成することを考えると、本研究で捉えた姿を基に、非認知的能力を学校全体として捉えていくことも今後必要となる。

- 非認知的能力同士が互いに影響を与える可能性も見られたが、このことを明らかにするとともに非認知的能力を総括的に捉えていくことも必要だと考える。その際には、「社会に変革を起こす」こととの明確なつながりを捉えて、その育成に向けて取り組むことも重要であると考ええる。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領』東洋館出版社，2017年。
- ・中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』，2021年。
- ・OECD，ベネッセ教育総合研究所企画制作，無藤隆・秋田喜代美監訳『社会情動的スキル 学びに向かう力』，明石書店，2018年。
- ・白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』，ミネルヴァ書房，2020年。
- ・奈須正裕『次代の学びを創る知恵とワザ』，ぎょうせい，2020年。
- ・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』，東洋館出版社，2017年。
- ・田村学『深い学び』，東洋館出版社，2018年。
- ・中山芳一『自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』，東京書籍，2020年。
- ・J.レイヴ，E.ウエンガー，福島真人解説，佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書，1993年。
- ・国立政策研究所『資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方の研究』，2017年3月。